

日本・中国・朝鮮の人物から見えてきた アジアダイナミズム

2011年度 インターゼミ アジアダイナミズム班 中間発表 資料

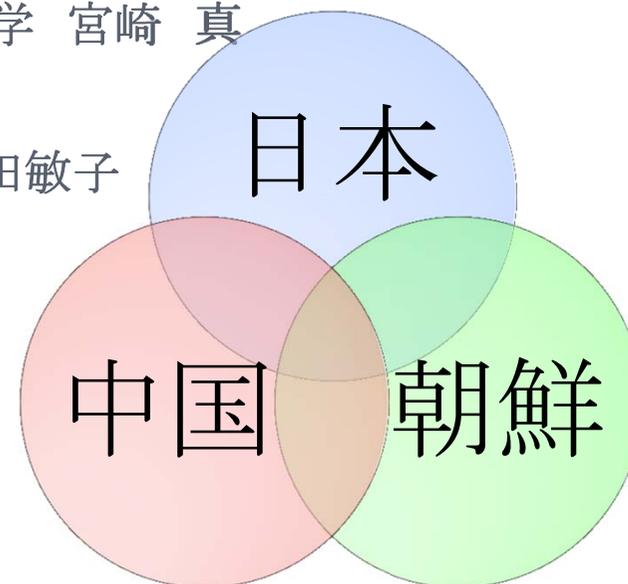
2011年8月18日

インターゼミ アジアダイナミズム班

4年 西村 遼 野崎 学 宮崎 真

3年 星野 一

2年 加藤 駿介 吉田敏子



目次

1.はじめに ～これまでの研究調査の流れ～

2.グループの問題意識

3.全体的結論

4.日本・中国・朝鮮3カ国の歴史的人物調査

日本

「藤野巖九郎と魯迅から」

中国

「孫文から考察した中国と日本の交わり」

朝鮮

「安重根と伊藤博文から」

6.今後の課題

7.参考文献

はじめに

～これまでの研究調査の流れ～

1. 日本・中国・朝鮮で国を越えて交流した歴史的人物の文献を読んだ。

その際に、日本・中国・朝鮮のグループに分かれ、どんな背景で何をした人物か、それからそれぞれの問いを見つけ、その答えが何かを考えた。その考察を通して導き出された問題や重要な概念について評価した。

2. それぞれが問いについて考える中で、全体の問題意識について再考した。

3. 自分自身にとって歴史的人物を身近に感じ、オリジナリティ溢れる感想を持つため、フィールドワークを行った。

主なフィールドワーク先は、東京国立博物館での「孫文と梅屋庄吉～100年前の中国と日本～」や、韓国訪問予定

4. 秋学期に向けて東アジアの歴史に精通している教授にインタビュー調査を行う。(多摩大の教授をメインに行う)

2. グループの問題意識

なぜ、歴史的人物を学ぶ必要性があるのか？

文献からただ歴史的人物を知るだけでいいのか？

歴史的人物の研究を通して、何か問いが生まれませんか？
(フェーズ1)

何故、アジアダイナミズムというグループ名か？

そもそもアジアダイナミズムとは何か？
(フェーズ2)

歴史的人物の研究から、
アジアダイナミズムを理解する手がかりがないだろうか？

どう日本・中国・朝鮮といった東アジアダイナミズムが歴史を残し、
現在に影響を与えてきたか。

アジアダイナミズムの理解から、
今のアジアにおける課題に対する解決策の糸口が見えないだろうか？
(フェーズ3)

全体的結論

- アジアダイナミズムとは、アジアにおける人の行動や、人の行動と交わり合うことで生まれてきた力があるという考え。
- 歴史的人物たちは、「自己の思想」を確立すべく、他者と意見や考え方を相互に分かち合い、自己の努力は勿論の事他者の力を借りて、自己の考えを確立し、国を変えていった。
- 歴史的人物たちは、困難や苦難を乗り越える時には、自己で築きあげた人的ネットワークは一種の力である。
- 人的ネットワーク構築に当たり、本人たちは「信念」や「志」を重要視した点が多い。

日本

6

藤野先生と魯迅の関係

7

担当 野崎 学
星野 一

藤野源九郎と中国との関係

状況

- 22歳の時から愛知医学校の助教諭として、解剖学を指導していた。日清戦争以降、中国からの留学生にも西洋の解剖学を指導するようになり、1904年から仙台医学専門学校の教授として解剖学を教えていた際、魯迅に出会い、他の中国人留学生と共に親身に指導した。

問

- 何故、藤野先生は親身になって魯迅を教えたのか？
- 魯迅の人生の中で、藤野先生以外にも影響を与えた日本人はいたのか？
- 魯迅は日本留学時にどのような行動を取ったのか？
- 藤野源九郎は、どのような中国観をいただいていたのか？その背景には何があったのか？
- 藤野源九郎の生き方から見える現在への教訓は何か？藤野源九郎は現在の日本、中国、韓国それぞれにどのような影響を持っているのか？

評価

- 仙台時代に在学した仙台医学専門学校にて、恩師の藤野先生と出会う。
- 魯迅は親身な教育をする藤野先生を尊敬し、日本人の真面目さを見習い、感化される。

藤野巖九郎 1874～1945

- 略歴
- 1874年 福井県(当時・敦賀県)坂井郡本荘村下番生まれる
- 1892年 愛知県立愛知医学校(現・名古屋大学医学部)入学(18歳)
- 1901年 仙台医学専門学校(現・東北大学)の講師となる(27歳)
- 1904年 解剖学の講義で周樹人(魯迅)と出会う(30歳)
- 1906年 周樹人、仙台を去る(「惜別」の写真を贈る)(32歳)
- 1917年 故郷に戻り、次兄・明二郎を手伝い診療に従事(43歳)
- 1935年 岩波文庫「魯迅選集」を読み、教え子である周樹人が作家・魯迅になっていることを知る(61歳)
- 1945年 往診中に倒れ、逝去(71歳)

藤野巖九郎の行動と信念

藤野源九郎は、魯迅を含めた中国人留学生に対して、当時の日本人が中国人に対して抱いていた差別意識とは異なり、教授として親身になって指導した。

- その原動力は、日本が中国から多くのことを学んだことへの感謝の気持ちであり、中国発展のために尽力したいという藤野巖九郎の志であった。

藤野巖九郎の中国観

- 藤野巖九郎は幼少の頃から、父升八郎から漢文を習い、さらに野坂源三郎の私塾に通い漢学を学んだ。



- この時に受けた漢学の素養が、中国や魯迅に対する好意に繋がったのではないかと考えられる。
- (戦勝ムードの中で、当時の日本人が中国に侮蔑の気持ちを持つ中で、藤野巖九郎の自己の信念に対する姿勢は変わらなかった。では日本人ではなく朝鮮の人物から見た日清戦争前後の中国観というのはどのようなものであったか気になるところである。)

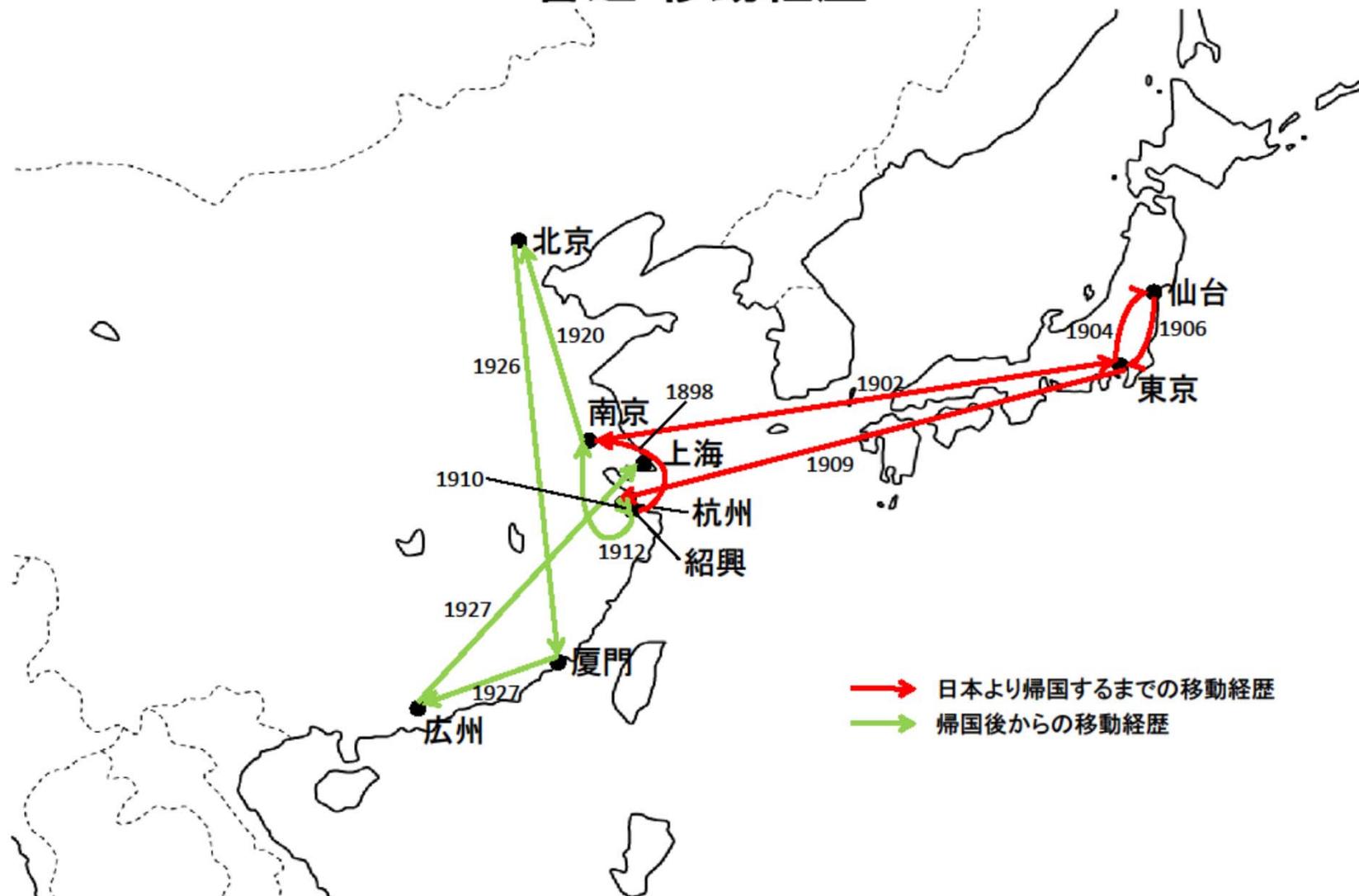
魯迅の志

- 魯迅は中国社会に根付く「馬々虎々」(マーマーフーフー)が中国(漢民族)の死敵であると見なし、終生それと戦い続けた。
- 馬々虎々とは？
 - 中国社会に存在するあらゆる「虚偽」(「ごまかし」)、または「虚偽」を生み出す土壌
 - まあまあといったニュアンスで使われることも往々にしてあるが、魯迅が問題視した馬々虎々の意は「虚偽」「欺瞞」をも含む人間的いい加減さ。

魯迅の志

- 礼教(儒教)は、封建社会にあっては、支配貫徹のための道具となり、果ては「食人」ともいうべき非人間的な封建社会の支柱と化してしまった。
- 魯迅は中国社会のいたるところに存在する「馬々虎々」が無限に「欺瞞」的政治社会を生み出しているとし、これを絶つことなくして、悪霊支配(儒教思想に基づく封建主義)の打倒はありえないと考えた。
- 魯迅が中国(民族)の再生のためにもっとも力をそそいだのはこの問題であった。

魯迅 移動経歴



出所：片山智行「魯迅」、藤井省三「魯迅」より インターゼミ・アジアダイナミズムグループ星野作成

日本留学で求めたもの

- 魯迅は、抗日の気運が高まっている際にも、「日本の全部を排斥しても、あの真面目という薬だけは買わねばならぬ」と言っていた。
- 魯迅は「馬々虎々」の克服のために、日本人の「真面目という薬」を求めた。
- 『藤野先生』は真面目な日本人のひとつの典型を示しており、中国(民族)の病気をなおすための「薬」を示した作品。

日本留学

- 20歳の魯迅は1902年(明治35年)4月4日に日本留学生として横浜に上陸した。
- 当時の日本は、「排満」を唱える改革派中国人の最大の拠点であり、また「立憲君主制」の変法派の拠点でもあった。
- 来日後間もなく、魯迅は嘉納治五郎が清国留学生向きに開設した弘文学院に入学した。
- 魯迅は、日本を訪れた際、蔑称で呼ばれることや清朝への服従の証である辮髪強制などの差別を体験し、この屈辱から中華民国への愛国心と民族意識に目覚めた。

日本留学時に抱えた問題意識

- 日本にやってきた魯迅は、哀れな状態にある清朝支配の祖国を改めて眺めやり、急速に民族意識に目覚めていった。
- 東京にて友人の許寿裳と以下の3つの問題を議論
 - 理想的人間性とはどういうものか
 - 中国民族にもっとも欠けているものはなにか
 - その病根とはなにか
- そして、最大の問題は中国(漢族)の満州族による異民族支配であり、病根はそれに甘んずる「奴隸根性」で、「唯一の救済方法は革命である」という結論に至った。

魯迅と藤野先生

- 魯迅が仙台医専在学時、解剖学の藤野先生は自分の講義が筆記できるかと問い、ノートを提出させて朱筆で添削してくれた。
- 書き落とした部分の加筆だけでなく、文法の誤りまでいちいち訂正してくれたという。
- これは毎週行われ、彼の全講義が終わるまで続けられた。
- 魯迅は藤野先生に真面目な日本人の典型を見た。
- 魯迅は彼の性格を「偉大」といい、書斎の壁に彼の写真を掲げた。

今後について

- 個人的にアジアダイナミズムとは、アジアの国々の隆盛であると思う。その中で、一つの国が栄えれば、その国にヒト、モノ、カネ、情報が流れ込む、それが交流が生まれる土壌となる。藤野巖九郎と魯迅の場合もそうであった。
- ただ藤野巖九郎と魯迅の交流が素晴らしいものになった理由は、藤野巖九郎の深い中国に対する理解と感謝の気持ちである。
- アジアの国々の捉え方の良し悪しはよしとして、どのようなプロセスでそのような見方になったのか、もう少し人物を通してみる必要があると感じた。(特に朝鮮)

今後の研究の課題

- 下記の興味、関心について研究を深める
 - 何故、藤野先生は親身になって魯迅を教えたのか？
 - 魯迅の人生の中で、藤野先生以外にも影響を与えた日本人はいたのか？
 - 魯迅は日本留学時にどのような行動を取ったのか？
 - 魯迅は当時の韓国に対してはどう考えていたのか？
 - 魯迅の生き方から見える現在への教訓は何か？
 - 魯迅は現在の日本、中国、韓国それぞれにどのような影響を持っているのか？

中国

21

孫文から考察した 中国と日本の交わり

担当 宮崎 真
吉田敏子

孫文と日本との関係

状況

- 中国は清朝の下、国家の独立を危うくしていた。孫文は清朝打倒のため興中会を設立、1906年に三民主義を掲げ、その実現のため辛亥革命を起こし、1912年に中華民国の臨時大総統に就任する。その孫文を中国の同志や支援者だけでなく宮崎滔天をはじめとする様々な日本人が支えた。

問

- 孫文が生きた時代の中国と国際社会、特に日本との関係はどうだったか？
- 孫文は革命運動の過程で、どのような困難に向き合い、どう日本と関わり合ったか？（例 宮崎滔天や梅屋庄吉とはどんな関係だったか）
- 孫文と日本との関係から見えた現代の課題は何か？

評価

- 孫文と日本との関係を知るにつれ、その当時の東アジアの情勢をより深く理解することができた。孫文を支え続けた日本人がいても、その後の日中関係は孫文の期待を裏切るものだった。しかし、孫文と日本人の関わり合いがもたらした影響は今にも残っている。

孫文から見た中国と国際社会

- アヘン戦争後、徐々に西欧列強諸国による支配が進んだが、中国は清朝政府の伝統主義と対立により近代化が日本よりも遅れていた。第一次世界大戦以後、日本の中国に対する帝国主義的姿勢も益々強まるばかりだった。

その様な国際情勢の変化に対して、孫文は「清朝打倒」、「共和国の創設」、「三民主義」、「アジアの連帯」を次々と唱えた。しかし、アジアの連帯は果たされぬまま、孫文死後、毛沢東や蒋介石らの時代に移っていった。

「大アジア主義」

1924年の「大アジア主義講演」が日本の対アジア政策に警鐘を鳴らすものとして絶賛的に扱われていた。

例：西洋の番犬より、東洋の王道になれ

という孫文の考え方は、今の日本にとっても示唆に富んだ国のあり方に見えた。

孫文の困難と日本との関わり

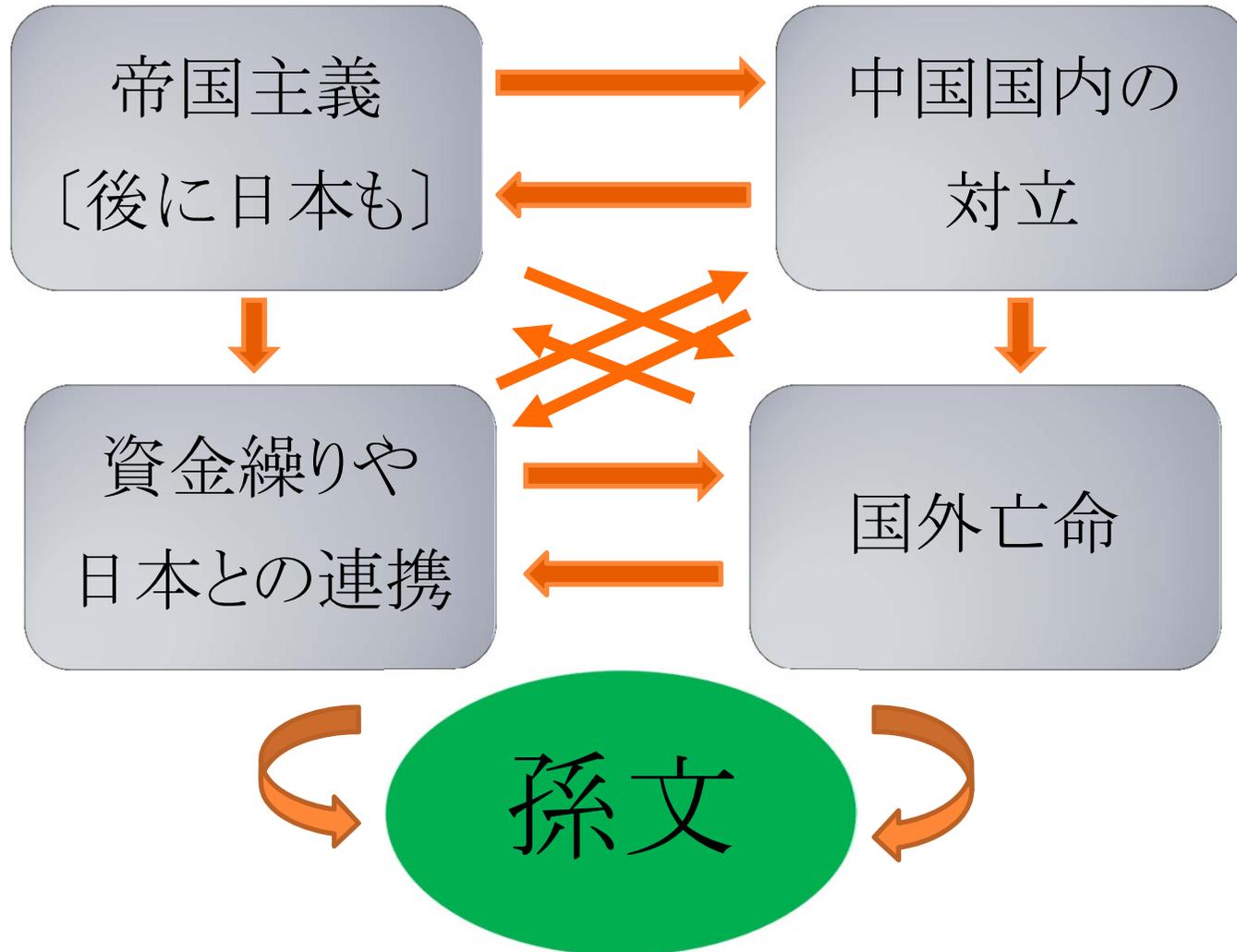
- 孫文は革命の過程で、資金繰りや、国外への亡命など様々な困難があった。孫文は様々な人間と関わり合いながら、度重なる革命の失敗、中国国内の対立を乗り越えようとした。

そんな孫文を、宮崎滔天や梅屋庄吉といった日本人も支援した。ある者は孫文を経済的に支援し、ある者は孫文に安全な住まいを提供した。

孫文は、急速に近代化を進めた日本は中国にとっての範とみなすだけでなく、日本人によって革命運動が支えられ、日本と中国の連帯にも強い期待をかけた。ところが、その後の日中関係は孫文の期待を裏切るものだった。

しかしながら、孫文と日本人の関わり合いがもたらした影響は今にも残っている。

様々な要素と 관련된 孫文の困難



孫文を考察して見えてきた 現代の課題

- 個の課題：自己の確立と能力、倫理観の養成
- 国のあるべき姿：個の尊重に基づく統治性のある国
- 国際関係：諸外国との交流の拡大と深化
→ 平和と安全保障、共同体意識の形成

また、孫文の時代は、政治家は個人的な付き合いはあったけれど、今の政治家はそれが欠けているのではないか

今後の課題と参考資料

今後の課題

- これまでの研究を下に、世界情勢の変化やその影響を踏まえ、さらに日本・中国・朝鮮の人と社会がもたらしてきた影響や力についての理解を深める。もちろんダイナミズムだけでなく、社会の構造の中にはらむメカニズムという別の側面についても考察を続ける。
- 中国と日本という二つの関係から、中国、日本、朝鮮とさらに複数の関係に目を向ける。

参考資料

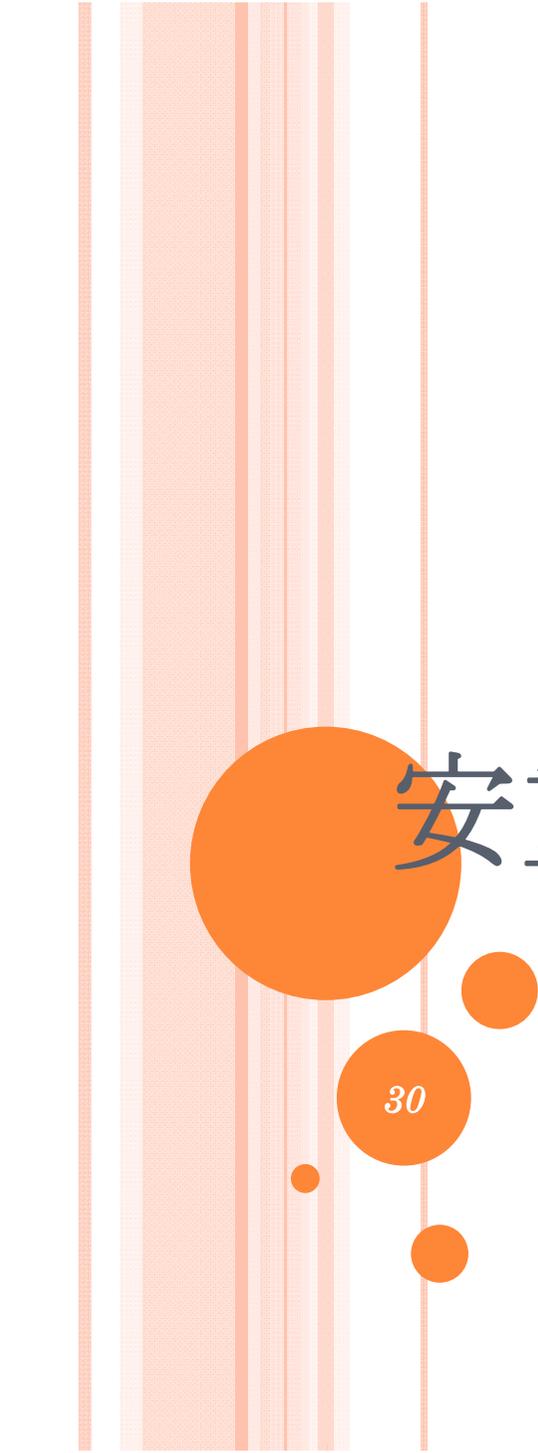
宮崎滔天著 『三十三年の夢』

Foucault, M. (2007). Security, Territory, Population. New York: Palgrave Macmillan

保坂正康著 『孫文の辛亥革命を支えた日本人』（2009年 ちくま文庫）

朝鮮

29



安重根と伊藤博文の思想

30

担当 西村 遼
加藤 駿介

伊藤博文の思想とは

何を行い、何で名前が残ったのか？

- 伊藤博文は、アジアの立憲体制の生みの親であり、立憲体制の下で初めに活躍した議会政治家である。
初代、5代、7代、10代の内閣総理大臣及び枢密院議長また「朝鮮統監府」初代統監である。
- 日本人の中での伊藤博文の印象「初代総理」
- 朝鮮人の中での伊藤博文の印象
「朝鮮統監府初代統監」＝「反逆者」

伊藤博文の人物思想(戦争から分かる事)

状況

- 日露戦争開戦直前の1904年1月～日露宣戦布告(2月10日)まで開戦か戦争回避かをめぐり政府内では激論が度々交わされていた。
- そのなかで、伊藤は断じて日露協商の希望を捨てていなかった。背景の一つとして、戦時財政の見通しが立っていなかったことがある。

問

- 伊藤博文は開戦をなぜ固辞したのか?
- 伊藤博文は誰よりも状況把握に長けていたのではなかろうか?
- 伊藤博文の考えを理解した人物は?

方向性

- 日露戦争から伊藤博文の思想を伺い、「平和主義者」という一面を垣間見る事ができた。
- 伊藤博文の「価値観」を掘り下げる事ができた。
- 伊藤は自己過信することなく、現状認識を徹底的に行った。

日英協商・日露戦争の起源

日露協商＝伊藤博文・井上馨
日英同盟＝山縣有朋・桂太郎

戦争開戦派
(山縣・桂)
日英同盟

論争

戦争回避派
(伊藤・井上)
日露協商

- イギリスは義和団事件以降、中国から撤退しないロシアに懸念といらだちを持っていた。
- イギリスは他国と積極的に手を組むことをしてこなかったが、ロシアが中国に今後留まることを懸念し、ロシアの牽制を目的と位置づけ「日英同盟」に踏み切った。

日本が日露戦争に踏み切った理由

- **日本が日露戦争を踏み切った最大の理由は「大韓帝国の植民地化」を絶対のものにするため!**
- 「日本が朝鮮半島を勢力圏内に収めることを目的としたものである」
- 1903年まで日本政府は「満韓不可分論＝満韓交換論」の考えで日露協商に望んできたが、相互に合意には至らなかったため。

伊藤博文の思想

- 伊藤博文は、「理想派」というより「現実派」であった。
- 現状分析・認識を徹底的に行い、問題点を洗い出し、一番良い方向に導いた。
- 最後の最後まで「日露協商」を望んでいたことから、戦争を好まず「平和解決」の糸口を見いだそうとした事に間違いはない。
- この点から伊藤は平和主義者の一面も伺える。

安重根から見た朝鮮

安重根とは何者か？

- 初代の韓国統監伊藤博文を射殺した人物
- 元々『大韓義軍』と言うグループを組織し、抗日闘争活動に身を置いていた。

安重根の経歴

- 1879年: 黄海道生まれ
- 1909年: 伊藤博文をハルビンにて暗殺
- 1910年: 2月14日旅順にて死刑

安重根の存在(韓国{朝鮮}の場合)

英雄

義士

独立運動家

テロリスト

何故伊藤博文を暗殺したのか・・・？

- 閔妃殺害に対する復讐。殺したのは、三浦梧桜だがその黒幕は伊藤博文と言う理由
- 日本を韓国から遠ざけるため
- 日本が韓国の政治権や他の権利を奪ったから

【韓国での反応】

- 韓国では今でも安重根を『義士』と称されている。
- 1970年にはソウル特別市に『安重根義士記念館』が建設された

刑務所内での安重根(牢番の千葉さんの証言)

- 千葉さんとは、千葉十七さんの事で、安重根氏の担当者である。
- 死刑直前には、安重根氏を尊敬。
- 安氏が書いた『為国献身軍人本文』の遺墨と薬指を切断した左手の墨形を受け取った。

安重根の処刑後・・・

- 安氏の処刑後牢番の千葉さんの地元の宮城の大林寺にて、千葉さんと共に埋葬されています。
- 千葉さんは安氏が死後ずっと供養をしていた。
- ハルビン事件に居合わせた満鉄の筆頭理事の田中清次郎は後年『日本人を含め、一番偉いのは？』という問いに対して『残念であるが、安重根である』と答えた。←つまり日本でもテロリストではなく、尊敬する人物にもなっている。

全体的課題

- 各歴史的人物がどのように関わり合い、思想を共有し、国を変えていったのかをさらに深く掘り下げる。
- 歴史的人物は「光」の部分もしくは「影」の部分が印象に残りやすいが、別の捉え方考え方を模索する。
- 日本・中国・韓国3カ国の歴史的人物たちは、人的ネットワーク構築までの「挫折や苦悩」をさらに掘り下げる。
- フィールドワークや専門家の意見を取り入れ、各人物たちの価値観の幅を広げる
- 現代に繋がるべく、「志・信念」をさらに取り入れ、今後のアジア人との関係構築の道筋を見つける

参考文献

- 世界を知る力
 - 20世紀から何を学ぶか
 - パリの周恩来
 - 周恩来19歳の東京日記
 - 毛沢東と周恩来
 - 日韓中の交流
 - 韓国現代史
 - 韓国現代史
 - 中国歴史・文学人物図典
 - 日中関係150年
 - 満州近現代史
 - 孤島見聞
 - 戦争の日本近現代史
 - アジア動向年表2009
究支援部
- 寺島実郎著 *PHP*新書
寺島実郎著 新潮選書
小倉和夫著 中央公論社
矢吹 晋著 小学館文庫
矢吹 晋著 講談社現代新書
吉田光男著 山川出版社
木村 幹著 中公新書
文 京朱著 岩波新書
滝本浩之著 遊子艦
山中辰雄 東方書店
現代企画室 現代企画室
陶菊 隠著 上海人民出版社
加藤陽子著 講談社現代新書
- アジア経済研究所編 日本貿易振興機構アジア経済研究所研

参考文献2

- 伊藤博文と韓国併合 海野福寿著 青木書店
- 周恩来秘録 高文 謙著 文藝春秋
- 毛沢東の私生活 李 志綏著 文春文庫
- 孫文武装蜂起 陳 舜臣著 中公新書
- 孫文辛亥への道 陳 舜臣著 中公新書
- 孫文 - 100年先を見た男 田所竹彦著 新人物文庫
- 宋姉妹
- 中国を支配した華麗なる一族 伊藤 純・伊藤 真 著 角川文庫
- 孫文と袁世凱 横山 宏章著 岩波書店
- 中華統合の夢
- 革命家 北一輝 豊田 穰著 講談社文庫
- 藤野先生と魯迅 藤野先生と魯迅刊行委員会 東北大学出版社
- 石原莞爾その虚飾 佐高 信著 講談社文庫
- 吉田茂と昭和氏 井上寿一著 講談社現代新書
- 田中角栄研究-全記録 立花 隆著 講談社文庫